

防音フェンス

諸岡博熊

△神戸市企画局参事△

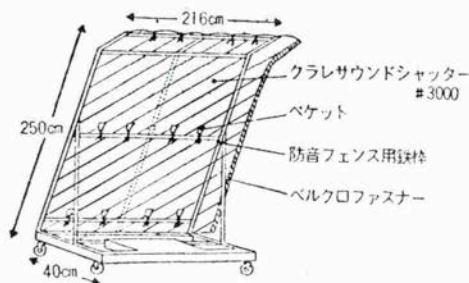
道路工事や建設作業に伴う工業騒音は建設業界にとって悩みの種である。その上、工事現場周辺の住民から苦情が持ち込まれ、業界では、工事に伴う補償金がかかりに高額につきコスト割れする恐れがでてきた。そのようなトラブルを完全に無くすことは不可能であるが、周囲の騒音を十ホン下げることができれば、人間の耳には、半分位に聞えるので、音を防ぐ囲いの開発を急いでいた。

クラレは、ビニロン基布を芯材とする軟質遮音材サウンドシャッター（商品名）を開発、道路工事現場でテストしたところ、周囲の騒音が十二ホン低下するという実験結果を得た。

サウンドシャッターは、ビニロン基布（クラレビニロン）を芯材とし、これに毒性のない特殊金属粉を配合したポリ塩化ビニール樹脂をサンドイッチ状にはり合わせ

さらにその表面を着色（ライトグリーン）したポリ塩化ビニールフィルムで被覆された製品で、厚さは一・二ミリメートルである。サウンドシャッターを利用して工事用の防音フェンスを開発している。

これは、高さ二・五〇メートル幅二・一六メートルの台車のついた鉄骨フレームにサウンドシャッターを張り付けたものを単位として、現場の長さに応じて横に並べ



クラレが開発した防音フェンスの構造

て利用するものである。フェンスとフェンスの接合部は、ベルのロファスナー（商品名）であるマジックファスナーを用いて音が外部に漏れないようになっていいる。フェンスのフレーム鉄骨は、組み立て、解体が簡単でその上、サウンドシャッターも巻き取り、折りたたみが容易なため、工事現場への搬入、搬出には打ってつけといわれる。その上、価格も高くないため、これからかなり普及するのではないかと思われる。

このような製品は、公害対策器材としてもっと早くから開発されて然るべきものであった。筆者が十年前にニューヨークの市街地工事で、これとよく類似した防音フェンスをめぐらして、道路工事などを実施しているのを見て奇異に感じた。しかし、工事現場の歩道を歩いてあまり騒音を感じないので、やはりこの効果が出ていたことと思う。

当時は風よけとか工事標識ぐらいにしかとっていなかった。

最近では工事用の抗打ち機などは機械そのものをすっぽりと遮音材で包み込む例がみられるが、まさに工事現場を覆いで包み込む工夫のあらわれとみてよいだろう。

●メッセ・レポート

胎動する

見本市都市 (1)

このたび、神戸経済同友会が都市問題に関する提言を行った(昭和五十一年四月二十七日)。

これは、非常にユニークなもので、I メッセ(見本市都市)をつくれ。II メッセを実施するため土地経営会社をつくれ。III メッセに跡利用できるような国際生活文化博覧会を誘致すべきだ。との内容である。

メッセとは独語の *Messe* で、一般に見本市と訳されている。しかし、西独では、*messe und Ausstellungen* と正式に呼ばれ、英語では *Trade fairs and Exhibitions* といわれる。これらからわかるように、単なる見本市ではなくて、博覧会も含まれていることが視える。ちなみに、*messe* と *Ausstellung* の区別については、西独では、バイヤーのみを対象にしたものが *messe*、一般市民の入場を認めるものが *Ausstellung* としている。

これは、見本市が博覧会から分化したためで、現在は専門家達のメッセとなっている。しかし、博覧会の歴史からみてもわかるように、まちをあげてのお祭りである。そこで、メッセ会場では、催物の内容にもよるがバイヤーのみの日と、一般市民も入れる日を設けたり、一方で専門化し分化していく専門見本市に対して総合見本市といった博覧会的要素を帯びたものを実施して、市民サーブに努めている例がみられる。

メッセとは、各都市のお祭りである。日本的に考えると非常にわかりにくいのであるが、結論をいえば、都市と都市の経済競争をしているのである。すなわち、城壁で囲まれた都市が、市民自らが自主性と創造性をもって、市民のために住みよいまちづくりに互にしのぎを削って

きている姿がこれだといえる。このことは、その都市のもつ市民文化——市民の優れた生き方をベースにして競争するのであるから、まさに、地域文化の競争といってもよいだろう。

戦後のわが国の都市のあり方は、いたずらに、中央指向型となって、独自性や地域性を放棄してきた。その結果、地域経済の活力が落ち、市民自らが立ち上らないために、経済地盤が沈下してしまったといえる。

地方都市はその独自の生活文化をベースにして、知恵の勝負をすべきであろう。情報産業時代といわれる今日こそ、企画力、運営力で都市競争がされるべきである。

このような考え方は、西欧でローマ時代からあったため、彼等にとっては、とりたてて云々するものでない。が、わが国にとっては、きたるべき情報化社会に対処して、都市間競争の理論は、まさに、その地域社会の中小企業振興の理論であり、新しい時代に応える経済の流れの変換を迫まる論理ともいえる。——経済の流れとは、消費者主義から生活者主義へと変りつつある流れのことである。生活者の知識レベルなり価値感の考え方こそ現在の文化をつくっていることをみると、その生活者の価値感で企業の提供する商品が変わる。このことは、生産者側から商品の原価計算の上に、生活者からみた価値がプラスされたもので、すなわち、付加価値と称せられるものがでてきたということである。情報化社会とはまさにこれが本質的な問題である。ある人は「坊さんのお布施だ」とひゆする。つまり、値段は売り手側が決めるのではなくて、買い手側がつけるということである。経済の価値感がこのように全く逆の発想になりつつあるという時代に、中小企業も生き抜かなければならないのだ。メッセとは、そのような経済の流れが変わりつつある——変っていることを企業の人々とともに市民一般が悟るまたないチャンスといえる。

都市文化をベースに、都市という受け皿のなかに展開されたメッセこそ、これからのわが国の地方都市を振興



ミュンヘン（西ドイツ）メッセ

ド志向であって、ソフトのような個人の資質に負うところが大きかったり、計数化できないものは難手とするところであるからだ。

そこで、企業をみると、大企業は、資金、組織、人材等に恵まれ、かつ、国家の庇護を受けて今日の姿となったといえる。官僚機構と同様なあり方がしばしばみられ若干ハード志向が強い。なぜなら、情報の価値を認めない風潮のわが国では、とかくハード中心の考え方になるからだ。

一方、中小企業をみると、人材、資金等々すべてないが、くしである。しかし、中小企業が企業に伍して立派に生き抜いているのは、企業主が、ごく一部の資質の秀れた人材が企業のなかで頑張っているためといえる。したがって、この人びとは、ソフトを大切にしている。とはいえ、中小企業のなかには、カネとかモノとかを重視するものであるが、このような企業は、低成長時代になって、伸び悩んでいる。ところがソフトを重要視している中小企業は、困っていないどころかどんどん成長している。この中小企業の人びとが、まちな生活文化の向上に、住みよいまちづくりに立ち上ることが、すなわち、都市間競争ともいえるのだ。経済の流れが変わりつつあるとき、これらの意欲ある中小企業の人びとが一日も早く時代の変化を察知して、たくましく生き抜かなければ、市民社会はよくならないだろう。

したがって、メッセとは、中小企業振興の都市間競争であるということを感じ取る。

このたびの神戸経済同友会の提言は、このような都市間競争の精神を *New Heart of Kobe* と名付け全市民的に展開することを呼びかけている。とくに、都心部に接して、百万坪といった広大な土地——ポर्टアイランドが完成に近づいている今日、この新しい土地に、新しい精神で、メッセを創設して、神戸をよみがえらせようとい述べていることは、時宜を得た提言といえよう。

させる一方策である。

ところが、各都市には、県また市によって、産業貿易館（都市によって呼び方は違っているが内容的には大同小異といえる）が建てられ、いたずらに展示場の大きさを競っている。すなわち、行政の手による貸会場といった施設の管理に終って、そこでは、企画し、演出され、見本市が運営される機能が付帯していないことが、諸外国のそれと比べて驚く。いわゆるハードウェアのみでソフトウェアの存在しないメッセ会場といえる。これらの産業貿易館はほとんど昭和四十年代に建設されていていわゆる経済の高度成長時代の遺物といってもよい。低成長経済下ではみむきもされなくなつて、しゅうろ悪な姿をあらわし、全て赤字である。このことは、行政に、ソフトウェアを望むことが間違っていたことを知るべきではなからうか。なぜなら、わが国の行政はハ

□ COAST LINE OF KOBE

神戸海岸線物語

カメラ
米田 定 蔵

〈おかわり号〉に乗った七人の船びと

奈良本辰也 〈歴史学者〉 石阪 春生 〈画家〉 たかはしもう 〈まんが家〉

荒尾 親成 〈元南蛮美術館長〉 三宅 武 〈詩人〉

多田智満子 〈詩人〉 斎藤 智 〈造形〉



ユーモアを交えた鳥居港湾局長の神戸海岸線の歴史を聞く乗船者たち。



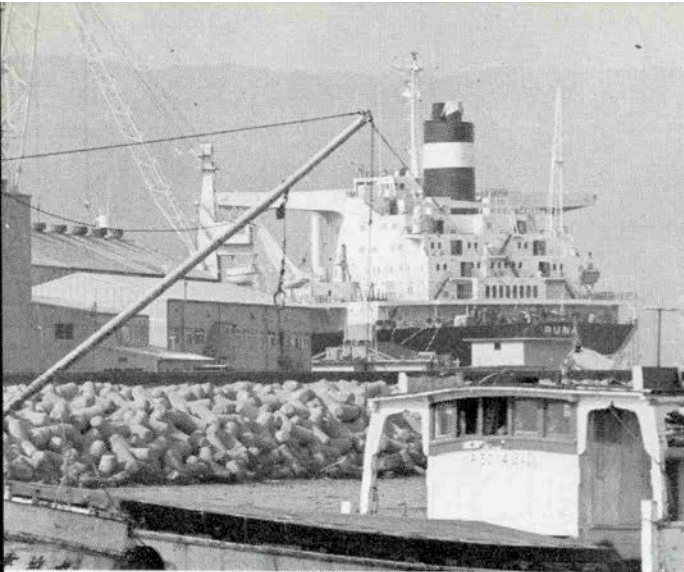
神戸港を
船で廻って
奈良本辰也 〈歴史学者〉

私は、海とか船とかいうと血が騒ぐ方である。いまでこそ四方を山で囲まれた小さな盆地の京都に住んでいるが、もともとは周防大島の出で、先祖は海を相手の仕事をしていたのだ。祖父の時代までは、九州と大阪の間を通う廻船問屋だった。

その日を見ると不思議に日程が空いている、偶然だ。楽しみというものは、このように偶然に湧いてくるものらしい。そこで今度は、私の方から電話して、集合場所と時間を確めたものである。そして、その日の朝いそいそとして出ていった。

「神戸っ子」の編集室にいくと、顔見知りの人々が次々に現われた。やがて、顔触れが揃うと出発である。船は須磨海岸につないであつた。いい船だ。広々とした船室は、ゆったりした応接間の感じである。いや、真中の机が大きいからしやれた食堂かな。

海から眺める神戸の景色は、私がこれまでに見た世界のどの港よりも素晴らしいような気がした。六甲大橋はま



須磨港から東へ。いろんな形のテトラポットの積み重ねが延々と続いていく。



須磨の海岸。新しく生れた「海釣り公園」がみえる。

だ建設の途中だったが、随分考えられた橋である。そう言えばあの海岸に立ち並ぶ工場や倉庫も、調和を考えた色彩感覚のなかにあった。港が演出されているのである。これが神戸という街の持つ近代性なのであるのか。神戸の港には、大きな人工島の建設が進んでいた。海水が茶色に濁っている。私は自然の破壊を好まないが、ここまでできたのなら、思い切って美しい人工の港を演出してくれといったくなった。しかし、船に乗って走るということは気持がよい。

海から見た

神戸



荒尾 親成

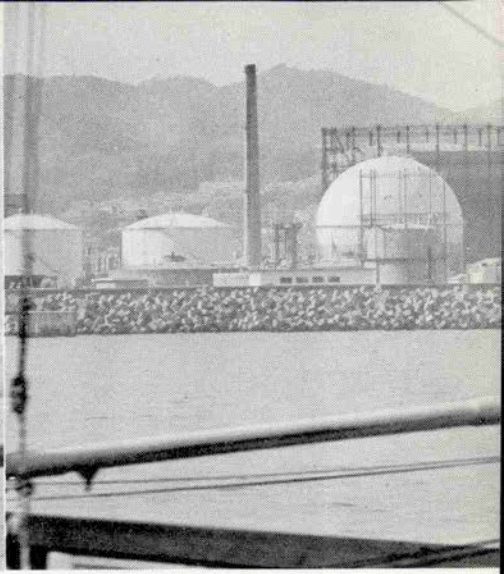
〔元南蛮美術館館長〕

私はかつて阪本勝先生が尼崎市長に当選されて間のころ（昭和二十七年）「海から見た尼崎は立派だヨ」と和船で案内され巨大な煙突の林立する大工業都市の雄大さに驚いたことがあった。

ただひとつ歴史に興味を持つ私が須磨から沖に出て鉢伏、旗降、鉄拐山、一ノ谷を望み、更に夕陽の淡路島と明石の瀬戸。明石海峡を一人せまく感じたとき、なるほどこれだなど感じたのは、古来都の武士は、京都を王城の地と見立て、ここを西の外堀たる要害地と考えていたことがハッキリと感じとられたことで干満の潮流も早く激しく屈強な地点と言うことがうなづけた。すなわち神戸でなぜ源平の合戦が闘われたのであろうか。神戸でなぜ楠公サンのいくさがあったのであろうか、幕末勝海舟がなぜこの地点に来て砲台を築造したのであろうか。由來天皇さまがおられ政治の中心地である王城の地京都を軍事的に守護する上に於て昔の人々は天然資源の川を利用活用して内堀・外堀を考えていた京都を中心に東の内堀は瀬田川、外堀は木曽川、南の宇治川、西の内堀淀川、そして外堀は、この明石海峡であったようである。そんなことを考え乍ら海上から神戸の山々や海を望んで



三菱重工業神戸造船所。15万トンタンカー「ルナ」が引き渡しの日待つ。



石油のタンクが並ぶ西部第1工区。(国鉄廣取駅南) 海岸線にはテトラポットの山。

いると、また違った歴史の追憶が走馬灯のように去来して楽しい。

船が東して摩耶山を望むと一段と高く見えて美しい。蕨村もよくこの山に登ってしばしば句会を開いたとのこと「葉の花や摩耶をくれば日の暮るゝ」もつと古くは芭蕉もそして明治に入つて子規居士も数々の名句を残している。この次は海から見た神戸の夜景を、楽しませて欲しいものである。

港の変質

多田智満子

△詩人▽



まず四つの単語(地名)をならべてみよう。務古、牟古、武庫、そして六甲。

はじめの三つをムコとよむことは、誰にでも納得がいく。しかし六甲がムコであったとは――

地誌に暗い私は、六甲山麓に住みながら、六甲が務古^{むこ}水門の当て字の一つであったとはついぞ知らなかった。鳥居港湾局長の理路整然たる説明を興味ぶかく拝聴し、今を去る千二百年の昔、大和から造大輪^{ぞお}田泊^{たはく}使が遣わされ、はじめて築港が開始された港草創の時期から、現在の壮麗な(といつてよいと思う)最尖端の設備をもつ大国際港にまで発展してゆく、その移りかわりを想像しながら、私は、務古から武庫を経て六甲に到るまでの、当て字の飛躍的發展(?)の方にむしろ感心していた。

港の概念の変質については、いたるところにその実例を見ることができる。たとえばコンテナ^{コンテナ}が好い例だ。

突堤に積みあげられた銀色の直方体のコンテナは、世界各地からもたらされる多種多様な商品を、少くとも外見上は単一均質なものに変えてしまった。万国統一基準のこれらの銀色の無表情な箱からは、もはや「船荷」ということばのもつ異国情緒などは全く感じられない。あまりに合理化された機能性が人間臭いロマンティシズ



ポートアイランドのコンテナヤード。世界一の近代的設備を誇る。



ポートアイランドの先ちょに立つ灯台。
船の運航には重要な役割を果たす。

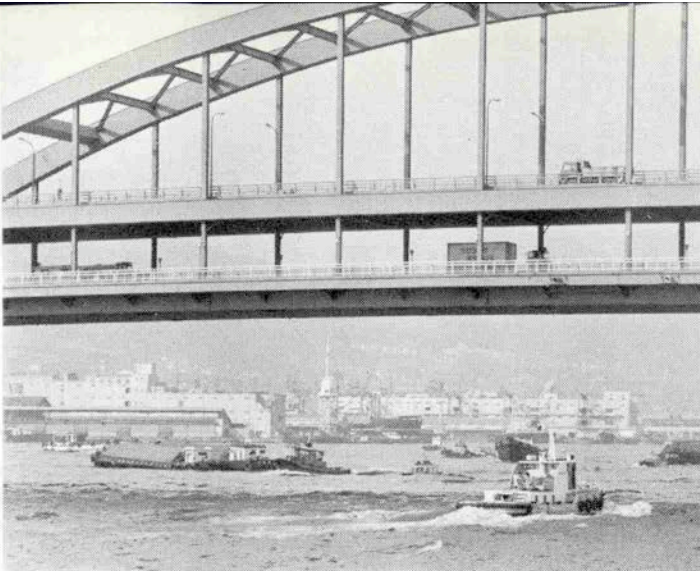
ムを過去のものとしてしまったのだ。
サイロにしても同様である。おおよだ号が東から西へと進むその航路の終り近くに薄茶色の巨大な丈高い円筒型をつらねた建物（？）が岸壁に立ちならんでいるが、これがサイロなのだそう。穀物を満載した船がここに横づけになると、クレーン位のサイズの細長い鳥の嘴状の管で、船艙から穀物が直接吸いあげられ、サイロに注入されるという仕掛けである。折しも一隻の船が作業中で、私たちはこの眼でそれを見ることができたが、この超絶的なサイロも、私などが抱いていた西洋の田園風穀物庫のイメージとは似ても似つかぬ、ばかばかしいほど大仕掛な機能性で、サイロということばを、務古から六甲への文字上の変移と同じくらい徹底的に変質させてしまっていた。



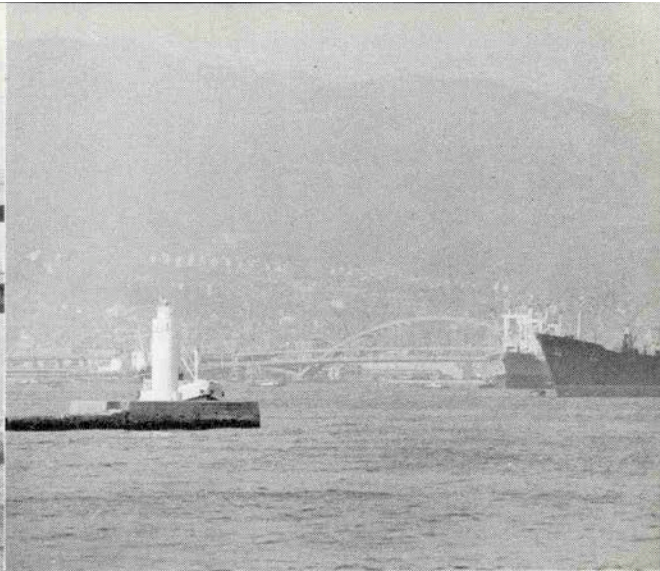
緑の中に
横たわる街
石阪 春生

△画家△

自分の住んでいる町を外からじっくり見ていると、ちょっと不思議な気持ちになる。街の中では毎日のように変る風景に驚いたり、うんざりしているくらしたが、こうした光景を見ていると少年の頃からすこしも変らぬ山々の形とその緑、そして海という、大きい景色の中で神戸は大自然の中の町としてしずかに息づいてる感じで、なんとなく安心してくる。船は右手に真赤な灯台を目じるしとして港へ入る。まもなく神戸の大事業であるポートアイランドが見えてくる。なるほど拡大な地面だ。この島に神戸の新しい町づくりがはじまるという。たしかに楽しい。こんな大きな地面が町の中に生れることはちょっと外の町では考えられることはできない。これからの神戸の形になりうるわけだから、ちょっとおそろしいことでもある。こう考えて島を見ていると私はなぜか瀬戸内海に浮ぶ小島をぼんとここへおいて見たくなった。つ



ポートターミナルとポートアイランドを架ける神戸大橋をくぐると……。



和田岬から港内に入航。向こうにみえるのが神戸大橋。

まり、新緑の山々と町そして海。そこに浮かぶ緑の小島。まさに山の緑と島の緑の中に横たわる街、わが神戸ということになってくる。外国船たちはこうした緑の山、緑の島の人江のその姿を休めるといふ風ぜいになる。人工の島ポートアイランドが緑一色になってから、その中に建物たちが出来はじめてもかまわない。緑の中に真白な町が……レンガ色の町が……とにかく緑の中にそうした一色の町が出来ないものだろうか。建物たちはけっして豪華でなくてもよい。ディテールを誇らなくてもよい。樹が生れ、家々が生れてきた自然のなりゆきにさらわれない街づくりが出来ないものだろうか。こんなとりとめない画かきの思いとはよそに、船は灘の港についてしまった。

神戸は巨大な

オーケストラだ

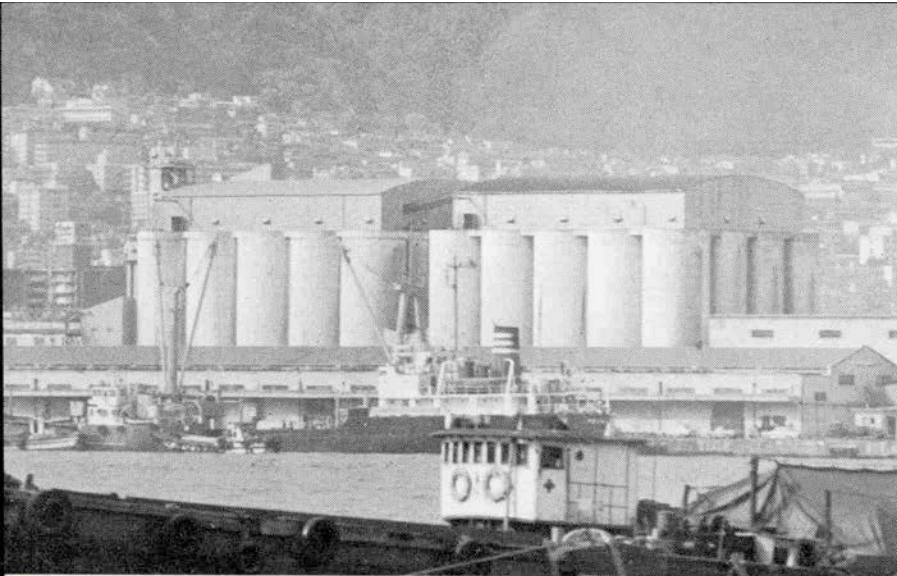


三宅 武 △詩人△

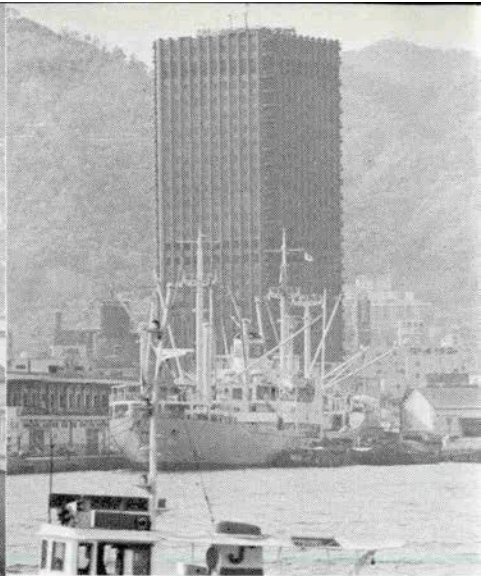
ちいさな乙仲で、ひとさしゆびだけで我流のタイプライターを打っていたA。税関と船会社の間を雨の日も自転車でかけずり廻っていた回漕店のB。フォークリフトで首をやられた倉庫会社のC。税関のD。パナナを背に細長い板を渡っていたE。そのパナナの数だけ竹べらを算えてわたすF。みなまじめに働く奴等だった。

この港は、ポートタワーが出来たころから様相を一変した。埋立てが進んだ。彼等の職場も、合併、吸収、解散がどしどし行われていった。検数員のGも、今は鉄工所勤めをしている。当時から今まで、同じ部署で仕事をしているのは税関のDだけになり、こいつも白髪の目立つ年齢になった。

海から岸壁を眺めると、みんなが、あの背後で働いていた姿が思い出される。港はかわった。神戸の港は世界第三位になった。親しかった無名の彼等は、第三位になっただけの幸福をあじわっているだろうか。



東部第2工区。近代的なサイロが林立する。



手前はボートターミナル（外国航路）後は神戸商工貿易センタービル。さすがに高い。

長田港から東部第四工区まで、見わたすと以外に狭いことに気づく。すきまなく立ち並ぶ造船、石油、食糧、倉庫、鉄鋼の企業マーク。ケバケバしい色のコンテナとそれを積み込む船の、かつての戦艦船を思わせるスタイル。枯枝のように腕をのばすクレーンの列。想像もつかぬ富が生み出されているにちがいない。ここからの眺めは、他都市の人々が見るような車なる「シツクでハイセンスでエキゾチックな街コウベ」とはかなり異なった印象である。神戸は、そのような消費型の都市ではなく、港湾を背景とした産業の街であるのがよくわかる。

山から見下ろすとき轟々とひびいている音。街なかにいるときの車の洪水。これらは、私たちをあわただしい雰囲気ひき込む。しかしひとたび、海上から見るとき、これらの騒音は、すっぱりと中空に吸い上げられたのかと思うほど街は静かだ。そして陸上の活動さえ、波のうねりに似てゆったりしているような感がある。

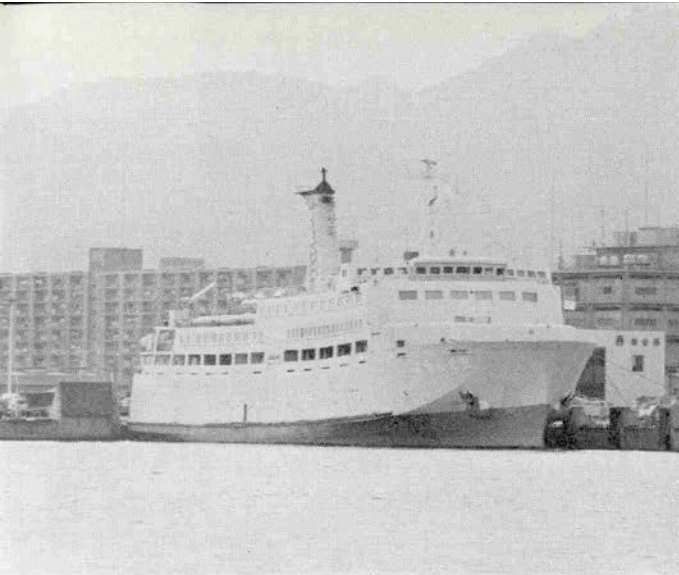
海上から見る神戸。街は扇形に並んだ巨大なオーケストラだ。摩耶、六甲はさしずめ金屏風であるうか。ポートアイランドを指揮台に見たててタクトを振れば、わたしだけにきこえるかすかな音楽がある。



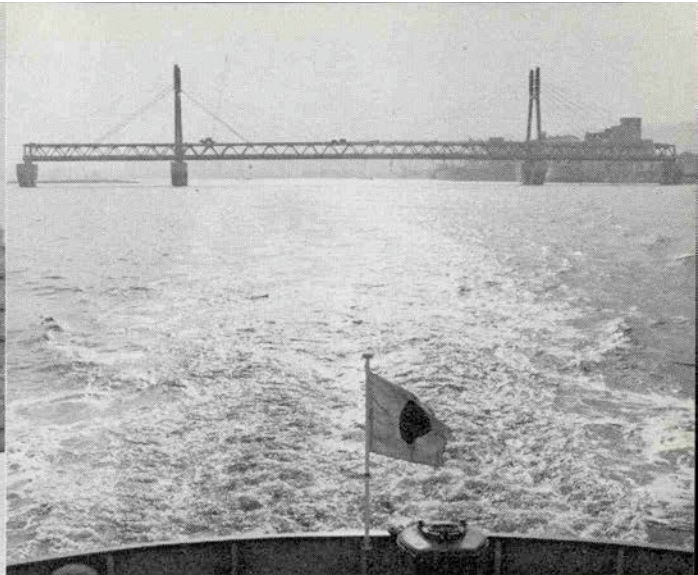
斉藤 智 ▲造形V

あわてて乗って

おおわだ号。勤め先からあわててそれに乗って、この方向から神戸を眺めたことはいかなと思ひながら、六甲から見下ろした夜景ほど刺激的ではないけれど、親しみがあつて、テトラポットが小石程にみえるところに積み重なって、その内に違った形のが又続いて、テトラポットにもはつきりと形にあらわれた歴史があるのだなと……。解説によるとちやうどその和田岬の辺に平清盛によるいわばうめたてのはしりともいうべきものがあるそうで、なるほどしかしどうやってやったのだらうな



深江の浜・東神戸フェリー埠頭、東部第4工区に到着。



埋立中の六甲アイランドに架かる六甲大橋。(建造中)

とか、当時は土地があまっていたのだし、ただの足場の
ためだろうか……とか。人はやりたいことがあればそれ
をやってしまうのが、歴史なのだろうし、今日はややか
すんでみえるあの山々のアウトラインは清盛の頃とそれ
ほどかわっていないだろうか……。海の底の底ま
でまる見えの時代の人の心はやはり直線的だっただろう
ななどとなんの関係もないことを考えながら、そのうち
に世界第3位の港のど真中をくぐりぬけ、やがてしばら
くすると海の上に立派な彫刻が二体、それは一体二五億
程かかっている六甲大橋の一部だそうで、ホロ酔気分も
ようやくきめたところで……終点。



神戸は 賢い女

たかはしもう

△まんが家△

神戸の“全身”を眺めてみると、やはり山と海の調和
がいいなアと思う。神戸は“美人”が横たわっているの
である。遠くから見ると美人に見えるのかもしれないが。
西の方が頭ということになる。須磨沖から東へ進む
“おおわだ号”である。神戸の“顔”から“ネック”、“バ
スト”から“ウエスト”、“ヒップ”から“脚線”と目を
移していくのである。カモメが群れ飛んで真珠のネック
レスとなり、白い雲はレースのカーディガン、港の中央
部は外国船がエキゾチックなムードをただよわせて“美
人神戸”のヒップのあたりということになる。

ファッション都市神戸も、やはり生活というものがあ
る。船がだんだん東に進むにつれて、ちょっと“美人”
も世帯じみてきたのである。工場群が見えてくるにつれ
て、神戸の台所をのぞき見たような気がしてきた。と
ころが、美人いわく“わかっていいるのです。ただいま新
しいドレスをオーダー中でございます。神戸をダウンカ
ラーでまわって世界の人にお見せするつもりです”。神
戸は賢い女である。

あかるくなった私のころ



顕微鏡・天体望遠鏡・航海計器・光学器一般

服部メガネ店

神戸・大丸前 TEL 331-1123

フランクフルトの
白い冠
上品なバターケーキです。



フランクフルター克蘭ツ

ドイツ菓子

Fachreim's

ユ-ハイム

このマークの店でお買求め下さい

本 店 神戸市生田区下山手通2-31 TEL (078) 331-1694
三 宮 店 神戸市生田区三宮町3-15 TEL (078) 331-2101
さんちか店 神戸市生田区三宮町1-1 TEL (078) 391-3539

オリエンタルホテル 結婚フェア

●7月10日(土) 11日(日) 午前10時～午後5時

- 挙式を間近に迎えられる方、花嫁の父・花嫁の母になられる方、結婚式に関心のある方——どなたでもご入場いただけます。
- 花嫁着付ショー、模擬結婚式、結婚に関する講演、又ご披露宴相談所からハネムーン相談所まで結婚に関するすべてがご覧になれます。



お申込みはおハガキで
〒650 神戸市生田区京町25
オリエンタルホテル
結婚フェア係まで

ホテル料理
と生ビール

- オリエンタルホテル3階ビヤガーデン
- 神戸新聞会館……………屋上ビヤガーデン
- 大丸神戸店……………屋上ビヤガーデン

□対談□

現代文学の潮流と現状

神戸文学賞・神戸女流文学賞の設定に際して

白川 渥

〈作家〉

松原 新一

〈文芸評論家〉

★文学熱にうかされていた昭和十年代

松原 僕は今日、白川先生に、先生がお若いときに同人雑誌などをおやりになった、その頃の文学青年の気質なんかをお聞きしたいんですが。昔と今を比べたら色々変わって来たと思いますが如何がでしょうか。

白川 僕は神戸に昭和十年に来たんですが、僕より前の時代には兵庫師範の先生をしていた詩人の八木重吉、それより古いところでは「風の唄」を出した明星派の歌人で、西の啄木といわれた前田純孝、フランスのベンジャミン・クレミュの「不安と再建」を翻訳した夢野の増田篤夫がおりまして、その弟子筋が竹中郁や若杉慧、詩人の福原清らですね。そういうグループがありました。僕らの時代になりますと神戸大学のフランス語講師をやっているスタンダールの「赤と黒」を翻訳したフランス文学の生島遼一、同じくドイツ語の講師をやっていた加藤一郎らがいます、その生島、若杉、それから僕なんか一種のサロンを形成していたんです。

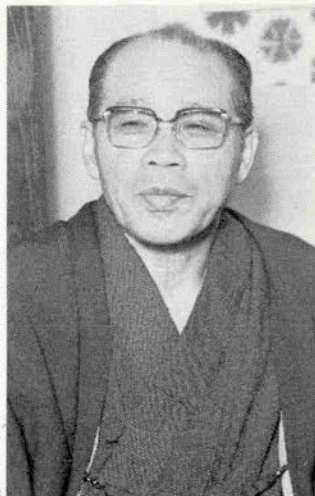
松原 昭和十年頃ですか。

白川 昭和十二、三年頃ですね。生島や僕や加藤や若杉などが文学の話ばかりしていました。その時期が昭和十

二、三年から戦争が始まるまで続きましたね。生島や加藤の教え子にも同人雑誌をやりたい連中が集まっていた。僕が神戸に来た頃、相当時代が厳しくなっていたので、僕らは文学の方では鳴りをひそめていたんですが、兵庫県庁へ勤めていたその頃、フローベール、モーパッサンを論じていた若者が、元町一丁目の「パイハイム」という喫茶店を根城にしていたんですね。そのうちのひとりのドストエフスキー論が本式で「罪と罰」なんかをやっていたんですが、感心して声を掛けたらこれが神戸小学校にいた若杉慧だったんです。それであくる日、職員室へ若杉を訪ねたんです。その頃僕は、県の学務課にいて思想視学みたいなことをやっていたので、この学校でも校長に迎えられたり、見送られたりしていた時代だったんですが、平教員だった若杉からは早速「やあ、白川君か」と君づけで呼ばれましてね。(笑)非常に印象に残っていますね。それで大いに気を良くして、それから肝胆相照らす仲になりましたね。

松原 文学を仲立ちにしてすぐ友だちになれる雰囲気があったんですね。

白川 そうですね。四十年近くつき合っていますね。それで、お互い文学をやりたいくてウズウズしているのに時



白川 渥さん

白川 そうです。だから、僕は、戦後大衆ものを書き出して、大衆作家などといわれたことに非常に屈辱を感じました。新聞小説や連載ものをたくさん書きましたが、苦勞しましたね。純文学がたつて文章に苦勞しました。

僕は今、自選集みたいなものをすすめられて、昔の自作を読み返しているんですが、余りにもつまらないことで文章に苦勞して来たなあと反省しているんです。一行のために一日かかったりしてね。

松原 昔、丹羽文雄は志賀直哉の作品をそのまま原稿用紙に写して、句読点の打ち方や改行の仕方を勉強したそうですね。芥川賞の選考委員をやられているんですが、選評を読むと、この一行があるために作品全体がブチ壊しになっているというような批評がありますね。たった一行でその作品が生きるか死ぬかにもものすごく神経を使つて、修業時代からやつて来られたんじゃないかと思えますね。

白川 僕ら、今考えたら、詩人もいたせいで文章にあまりに神経を使い過ぎたんですが、しかし、文学とは、もともと言葉を媒体としているのに、近頃では言葉に対する無神経な面が目立ちますね。この頃の新聞小説なんか読んでも、しょうもない会話で、あっさりと一日分を書いたり。昔は、会話は極力ひかえないと全体が死んでしまうといわれたものです。時代が変ったんですね。

松原 新聞の小説だけじゃなくて、純文学の雑誌でも、長篇一挙掲載ということが今流行になって、短篇小説は量も少ないし、質も余りよくなっているようですね。もっとも、この一行がどうかいっていただいてもいいぺんに四百枚も五百枚も書けないですけどね。

白川 長篇になるとともすると密度の薄い通俗小説になるね。雑誌の連載も大分やっただけれど、とにかく苦しんで書いた作品は全部短篇ですね。短篇は純文学たりうるが、長篇はなれないというのは日本の風土でしょうか。新聞小説がその作家の代表作だというのは夏目漱石ぐら

代が厳しくてね。僕ら『新潮』や『改造』を隠して持っていましたね。だから文学にあこがれる二人が朝に晩に文学談をしている内に、僕らの周囲には小説の他に短歌や俳句をやっている人も集って来ましたね。僕は十四年に「崖」を書いたんですが、空襲になる十八、九年頃まで、戦争中だけれどお互い着流しでウロウロして文学に熱をあげていましたね。その頃と今とは余りに違いますね。つまり、興味本位の小説だの、大衆小説だのを書く者は外道と考える風潮がありましたね。当時の週刊誌の懸賞小説に当選した連中とは袂を分かっていましたね。若杉は志賀直哉に没頭していましたし、僕は横光利一や舟橋聖一に熱をあげていました。毎月、文学の会を布引のお寺でやっていたんですが、集っていたのは全部純文学の人です。純文学一筋で、エンターテインメントや探偵小説の類には全く無関心でした。

松原 純文学と大衆文学の垣根というか、区別が非常にはっきりとしていたんですね。

白川 そうです。あの頃はグループがはっきりと分れていました。僕らの勉強会では、お互いに原稿を読み合ったり、見せ合ったりして、一行でも書き過ぎてると、手厳しくみんなからやられましたね。大向うを狙ったような書き振りととかはね。うんと省略の利いた作品を書かないとダメだという批評をやつて、お互いに興奮していましたね。

松原 それは生のお原稿を批評し合うのですか。

いで、今の作家の書く新聞小説や週刊誌小説は、作品として粗っぽいですね。だから、そういう意味で五百枚とか六百枚とかの長篇を純文学雑誌に一举に載せるというのは、これは文壇の新しい注目すべき傾向ですね。

★マスコミに踊らされている現状

松原 元々、日本の小説は雑誌と共に発達して来たんですね。雑誌は掲載量に自づと限りがありますから短篇中心の編集をして来たと思うんですけど、そういう枠の中で明治から大正の作家は、如何に少ない枚数で書きたいことを簡潔に書くに苦労して来たと思うんです。雑誌の頁をたくさんとることが非常に負い目になって、他の人の発表場所を自分が独占してけずってしまいうことに悪いような感じがあつて書きづらかったとある人がいってられたんですが、少ない枚数の中にどれだけ書きたいことを書くのかということにみんな苦労して、日本の短篇小説が発達して来たのじゃないかという気がするんです。そのへんの作家気質というものが最近変わって来て、一人で四百枚分の頁をとつても別に気にしないこともあるでしょうし、何となく分量で勝負するみたいなことが純文学の世界でもあつて、長篇というより、何となく長くなった小説という気がしますね。

白川 戦後変わったんでしょうね。

松原 『小説新潮』とか中間小説の雑誌が戦後出て来て純文学と大衆文学との境があいまいになったんじゃない



松原新一さん

かという気がするんです。

白川 昔を振り返ってみると鷗外や漱石は新聞小説を書いてても中間小説じゃなかったですね。

松原 あの時はどういう読者層を考えていたんですか。

白川 今ほど新聞の購読者が多くなかったから、水準が高かったんじゃないですか。それと、昔は性を扱うにしても、如何に筆を節約するか、省略するか、あるいは、何もかも書いてしまふんじゃないくて、余韻で如何に表現するか非常に苦労して、ここを書かないとダメだ、逃げたらダメだと思つても、自づと一つのケジメがあつたのが、今や、中間小説から私小説まで大衆化したことと同じように、人間の肉体の世界が野放しになっていきます。

松原 昔は恋愛や性の世界を書くことは、題材自体に制限があつて、難しいことだったんですが、戦後、性の世界も追求しないといけないということで一生懸命にやつた人は必然があつてやつたんでしょうが、小松伸六さんが、同人雑誌にまでポルノ的な傾向の作品が氾濫していて、それに文学的羞恥心がある作品とない作品とがあるということを書いておられるんですが、野間宏らに戦後抑圧された性の世界を書いた作品がありましたけれど、あれには圧さえられているものを何とか解放しようと苦心惨憺していて緊張感がありましたけれどね。

白川 一つは企業ジャーナリズムが作家に書かせているのじゃないですか。

松原 半ば以上がそうだと思いますね。読者の好奇心を刺激する以外手がないというふうですね。

白川 作家たるものはそこまで商売のために企業の犠牲にならなければならないのでしょうか。編集意図にそこまで支配されるなら筆を折るべきだと思うんですが。企業に振り回され、購買力をそるようなものをこれでもか、これでもかと書くのは、作家の一面の墮落だと思いますね。

松原 大衆文学の分野で色んなものを、正視しがたい

ルノを書いている人でも、一応、社会的には小説家として遇されますね。人気作家、流行作家として。今、あんな小説を書いている人でも元は純文学の世界で苦労していたのが、その辛さに耐えられなくて転身してしまってやっているケースがあるわけです。かつて高見順がいっ

たことなんです、最近の作家は流行歌手と同じようになってしまつて、目下出演中という状態でないことやっつけけないと。今の小説家も似たようなもので、どこかの雑誌に毎月出ていないと忘れられるという不安があつて、心のどこかではもっと蓄積しておかなければダメだと分っているのでしょうけれど、仮に一年でも休むことが不安で出来ない。

白川 東京の文壇の一つのムードが作家にそういう焦躁を感じさせるんでしょうね。

松原 そうでしょうね。あの人たちは競争の下真中にいるんですからね。

白川 僕は、昭和十六年に「村梅記」を書いた頃、横光利一に、マスコミを作家がねじふせんといかんという意味のことをいわれましたね。そういわれたことがズツと根を引いてこの年まで来ていますね。僕も妻子を養うために戦後、新聞や婦人雑誌に連載ものを書いて来ましたが。それで僕は六十になつたらこんな小説は一切書かないぞと公けにして今に到っているんです。もし、僕が東京のマスコミの中にいたら、今でもそういうものを引き受けて書いていただろうと思ひますね。東京の作家は東京にいるからマスコミの御用に應じるようになったと思ひますね。東京は文学のメッカだといふけれど、今は墮落したメッカですね。

松原 一人ひとりの小説家個人の問題を越えてしまつて

いるようですね。
白川 神戸文学賞を設定するなら、僕は出来れば純文学の人にとって貰いたいですね。マスコミに踊らされるような作品じゃなくて、もっと文章に苦労した人から出て欲しいですね。そうしないと文学が荒廃してしまひます

からね。神戸にもおりますよ、今だにただ活字欲にかられて文学熱に冒されてだけいる層が。そういう層は避けたい。

松原 そういう人たちが古い文学青年の気質みたいなものをつくつて来られたと思うんですが。だけど、最近はその古い昔風の文学青年が段々いなくなつて、文学をやつてはいるけれどそれは文学青年とはちよつと違うんですね。やつてても、他にもつといいことがあれば急にそつちの方へ平気で移つて行つてしまうようなことがありますね。

白川 とにかく、作家に羞恥心がなくなっている。マスコミの指揮があつたらどこへでも顔を出したいという文学精神をもった人が非常に多いですね。

松原 昔は小説家になるということは初めから貧乏を覚悟でなければ出来なかつたらしいですが、今は逆に職業として有利なことになっている感じがしますね。

『群像』の元編集長の中島さんがおつしやつていたんですが、以前はたとえば平野謙が文芸時評で新人の作家をとりあげてほめても、平野がほめているからすぐ尻馬に乗つて作品の注文に行くといふことはなかったんです。自分で読んでこれはいいと思つたら作品を頼みに行くといふことをしていたんですが、最近ではそんなことをしていたら到底間に合わない。まだ出て来て一年になるかならないかの新人の作家の場合でも、依頼に行きますとあと一年か二年位の間に二千枚ほど注文が来ていて間に合わない。(笑)それで、こんなことでは仕事をやっていられないといふことで辞められたんですが、時代が變つたといふことです。昔のように厳しい文学修業をやつて、純文学一本でやつて行くことが出来にくくなつて来たようですね。第一、純文学といつてもそれがかなり水増しされた純文学ですね。

白川 そういふことです。純文学一本でやっているようなまともな文学者らしい作家が神戸から生まれて欲しいものですね。
(神戸竹葉亭にて)

月刊神戸っ子15周年記念

神戸文学賞 神戸女流文学賞 設定

〈設定趣旨〉

このたび小社は神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動のいっそうの発展のために微力を尽したいと願っております。ここに第一回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに、清新かつ強力な作品の出現を期待する次第であります。

〈募集要項〉

- 一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者に限ります。
 - 一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。
 - 一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。
 - 一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度のあらすじをつけて下さい。
 - 一、締切りは九月十五日（当日消印有効）
-
- 一、入選発表は本誌十二月号誌上。昭和五十二年新年号より作品を掲載します。
 - 一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。
 - 一、入選作品の著作権は本誌に属します。
 - 一、入選作品各一篇には副賞として賞金二十拾万円が贈られます。
 - 一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市生田区東町一一三の一 大神ビル七階 月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。
- 電話〇七八―三三一―二二四六

☆なお、選考委員の方々は次号にて発表いたします。

主催／月刊神戸っ子

KOBECCO 15th

恒例神戸酒祭りの大盛況

飲みも飲んだり一石六斗こくと



上は花柳芳史社中の民謡・下は揃い呑み、左より田崎俊作、秋田博正、中西勝。

「こんな楽しい結構なことはいよ、美酒いっぱい、美女たくさん、素敵な音楽。三拍子揃ろうとはこのこと」と灘の生一本をふくみながらご機嫌。神戸の酒徒が一堂に会したありさまは、まさに圧巻、なんと一石六斗の樽が空になっってしまった。

「神戸酒祭り」として独立した催しとなったためもあって、酒徒は袴をぬいでゆるりと春の宵を楽しんだ。

4月22日(木)午後6時OPEN。サンボーホール1Fでひらかれたが、前日までゼネストで大弱りであった当日はスト解除で一息、好天にめぐまれてまた一息、ツキもよく出足も好調、000人の参加者で賑わった。5時30分から東川崎町恵比須太鼓保存会の少年メンバー20名、大人の方がたが6名で「不況風をふつとばせ」と景気よく太鼓を響かせて幕を切った。

まず、開会の挨拶と乾杯を嘉納正治(白鶴酒造社長)氏が「今日ばかりは乾杯を灘の生一本で、ロ



上はデキシージャズの演奏、下左は二紀亭紹介、下右は望月美佐さん／右はゲストのベギー葉山さん

ツクグラスでやって下さい」と元
 気いっぱい音頭をとる。続いて
 今年のブルーメール賞受賞の花柳
 吉叟社中が日本舞踊を披露。名物
 神戸酒徒表彰式は酒徒番付三賞三
 役の受賞者が立並び貫録のそらい
 飲み、満場は拍手かっさい。審査
 委員長石野成明（石野証券社長）氏
 が選考経過を披露した。

メインゲスト、ベギー葉山もこの
 集いの雰囲気にながめ。素晴らしい
 歌唱で、一言居士の多い酒徒
 を圧倒。お得意の「南国土佐をあ
 とにして」「学生時代」「つめ」な
 どを歌い、リクエスト曲「ラノビ
 ア」「ユー・アー・マイ・サン・シヤン」思
 い出のサンフランシスコ」などジ
 ヤズをまじえて大熱唱。伴奏は小
 曽根実クインテット。

お遊び「わたし飲む人アナタ食べ
 る人」と「連想しやせいゲーム」
 でキヤークィー。ワイワイ。

JAZZ & KOBEでは、神戸
 ジャズ50年にちなんで伊藤隆文さ
 んのトランペットほかによるディ
 キシーランドジャズの演奏。ディ
 キシーのビートに合わせて手拍子
 足拍子。ステージの上では踊りだ
 す始末。東京からかけつけたジャ
 ズ評論家のいそノテル氏もバン
 ドに参加し、ドラム演奏を披露。
 神戸で生れ育った日本のジャズ。
 さすがに神戸っ子の心にはディキ
 シーの精神が根づいていた。

我が愛する神戸を語る



心から神戸を愛する、左より楠本憲吉、淀川長治、朝比奈隆の各先生

四月三十日（金）午後六時から

神戸文化大ホールで月刊神戸つ子15周年記念文化講演会が講師に俳人の楠本憲吉先生、大阪フィルハーモニー交響楽団常任指揮者の朝比奈隆先生、映画評論家の淀川長治先生を迎えて行われた。統一テーマは「我が愛する神戸を語る」。

楠本先生「世界の味、神戸の味。」「一生忘れることのできない青春の町神戸」の想い出。それは離中時代の遠藤周作氏との交流にまつわる数々のエピソード——五年間、最下位の席次を二人で分かち合ったこと、佐藤愛子さんに共々惚れたが相手にされなかったこと、で彩られ、今、遠藤氏の意志の強さに改めて敬服する。

かつては白砂青松だった神戸。この白い砂、青い松が神戸の料理に影響を与えた。見た目に美しいし、味も薄口。また、料理に砂糖を使わないことから和菓子が発達した。神戸の素晴らしい味覚はヨーロッパとの永年の交流によって形成されたのだろう。

朝比奈先生「『欧州の街と音楽』」



三先生の熱の入った講演に拍手が送られる（写真上）、感激した女性が淀川先生に握手を求めるシーンも（写真右）

生活」。話は京大在学中、岡本あたりの桜景色の素晴らしさに魅せられたことから神戸と縁ができた始まり、阪急電車を経て、本格的に音楽の勉強を始めた昭和初期には、世界一級の音楽家が神戸の山手に住んでいたもので、勉強はピアノも指揮も総て神戸で修めた。ヨーロッパは小さな国が集っているが、文化の色合いは大体似かよっている。その意味でヨーロッパは一つだといえるし、音楽も異質ではない。東側も西側も音楽は東西を結ぶパイプであり、全世界の共通語となりつつある――。

淀川先生「映画と人生、そして神戸」。身振りを入れての大熱演。柳原で生まれ、新開地がホームグラウンドであり、育ての親であった。そして、聚楽館で見たアンナ・パブロワの「瀕死の白鳥」には言葉で表わせぬ感激を受けた。新開地で美の洗礼を受けたのだ。

生涯、映画を唯一の伴侶として生きて来たが、映画は生きていることをはげましてくれた。自分という人間はこの世で一人しかいないこと、人と人との暖かいつながりが大切なことを教えてくれた。私はかつて嫌いな人に会ったことがない――これが私の座右銘である――と。

熱の入った先生方の話に会場からはおしみな拍手が送られた。